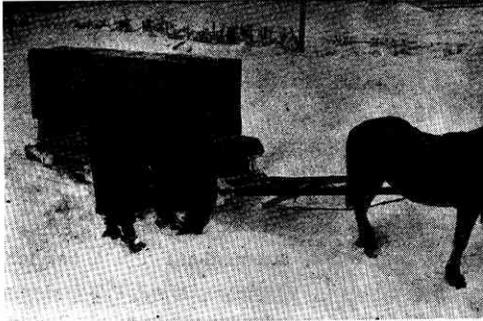


を作り、道川駅と実験場の往復に利用できた唯一の交通機関であった。カバーをしてあっても隙間から入り込む寒風にはいかんとも耐え難く、ある日などはコンロをその中に持込んだこともあり、あまり寒い時などは途中から雪中を歩いたこともあった。時に吹きだまりができている所などは、全員下車して吹きだまりの中を歩いて



第 10 図

渡り、そりの通れる所からまた乗車するといった具合であった。研究室では秋田実験場の冬期実験にそなえて防寒帽と靴を用意してあったので大変助かった。特に吹雪の中での作業では大いに役立った。実験期間中では計測室が完成しておらず、暖をとることも思うようにはいかず、たきびをしながら暖をとっては作業を続けるといった具合であった。

また実験当日吹雪であつたりすると、計測器の一部が外部にあつたために連絡が不十分なために計測できなかつたりもした。特にエンジンを暖める場合には、1時間前位から炭火で暖め適当な温度まで上げるのには温水を上面からかけたりして25度くらいまであげ、実験時に20度前後になるように特に注意したりした。冬期の実験では間に合せの設備では思わぬ失敗を起すことがあり、人間の機動性が、非常に失われ勝ちであることをしみじみと感じられた。(1957. 1. 30)

## うぶとゆうもの

ロケット飛しょう実験に従事する誰もが心にかけて守ろうとすることは、無事故で納めたいということである。ロケット実験は物理的に広い空間を必要とすること、推薬を取り扱う作業が伴うこと、新しい研究であるため未知の問題が多いこと、実験人員は最少限で編成していること、わずかな設備物を頼みになれぬ土地で行動すること等の諸条件に囲まれて、少し誇張したい方をすれば、寸時も私たちが緊張から解放させないものである。未知の問題へいどんで科学技術を開いてゆくためには、十分な勇気がいると同時に無事故でいこうとするために科学的考察を加えた細心の注意がある。勇気と細心という二つの心理が各人の心の中でとけ合きって一体となり作業は終点へと運ばれてゆく。飛しょう日をYとすると、2日前は、Y-2。Y-2のスケジュールがプリントになり、あるいは黒板に書かれ指示される。夕刻には、これをチェックしてY-2を終る。Y-1を迎えて緊張も一段と加わる。万全を期してYが来る。天候や作業準備の状況が判断されつつ、発射時刻が決まる。発射刻時をXとするとX-60分頃から、本部指令の数も増して来る。海上、陸上の整備もチェックされて、B旗をあげる指令が出る。X-15分である。以後の時間の経過は長いようで短く、短いようで長い。のろしの指令が出るとX-1分である。はやすべての人の待避は終わっている。読みが始まる。60秒前前から10秒前までは、10秒おきに、10秒前からは、1秒ごとにカウントする実験主任の声が一つは無電機にのって、一つはマ

イクを通して場内各班に流れていく。ある者は眼で、ある者は耳で、またある者は心を、すべての人が発射の一瞬神経を集中させる。物理的には、方敷キロないし十数キロに平板にぼろまかれぬ実験班員および整備員がこの時を頂点として、ピラミッド型に神経を集中していると想像されるのである。実験主任の“発射!”という号令とロケットが雄大な轟音を残して、空へ舞い上がった時を緊張の頂点とし、しかしややしばしこのピークの線は、ある波動した横線をえがいてくずれない。光煙を吐き、白煙を曳いて、空の一点へ吸いこまれてゆくロケットに対して、光学観測班は、眼鏡を駆動してあかかも流星を拾わんとするように追跡する。この間、約60秒、カップ・ロケットは、全実験班員の心を牽きつつ海中深く別離する。観測データの成否は、後刻として、全員はホッと、緊張は一時に解きほぐされるのである。

ある来賓は、ロケットの実験は、100機打ちあげて何機成功という確率打算でやるべきものではないでしょうか、といわれたが、それにやや近い実験のできたのは、ペンシル・ロケットの地上実験位で、あとは、1機1機が背水の陣といった緊張と慎重さで行つて来ている。そしてこの緊張は、全重量200grのペンシルから、40,000grのカップ128Jロケットに至るまで、毎回変らず続けられてきているのは、これをうぶな心というべきか、むしろ不思議と思ふ程である。(1957. 3. 29—J・S)